第2回
早春の会
合唱団
演奏会

2002.7.27.Sat.
6：00 p.m（開場5: 30）
東京文化会館小ホール

早春

プロフィール

1993年　3月	早春の会合唱団として発足 常任指揮者に松田匡史氏を迎える
10月	第39回目黒区合唱祭に参加(目黒公会堂)以降毎年参加
1994年 11月	第36回都民合唱コンクール　小ホール部門第一位
1995年 10月	第37回都民合唱コンクール　招待演奏(東京文化会館大ホール)
1996年 10月	第38回都民合唱コンクール　小ホール部門第一位
1997年 11月	第39回都民合唱コンクール　招待演奏(東京文化会館大ホール)
	織田久男先生謝恩コンサートに出演（こまばエミナース）
12月	東京文化会館主催クリスマスコンサートに出演(東京文化会館小ホール)
1998年　2月	世田谷ロータリークラブ35周年祝賀コンサートに出演 (東急文化会館ゴールデンホール)
1999年　8月	常任指揮者に井上実氏を迎える
11月	上野の森コーラスパークに参加(東京文化会館大ホール)
2000年　6月	第1回早春の会合唱団演奏会(こまばエミナース)
10月	第41回都民合唱コンクール参加　大ホール部門第四位
2001年　2月	常任指揮者に玉置清明氏を迎える
9月	上野の森コーラスパークに参加(東京文化会館大ホール)
10月	第42回都民合唱コンクール参加　大ホール部門入賞
2002年　7月	第2回早春の会合唱団演奏会(東京文化会館小ホール)

御挨拶

織田　久男

継続する事に願いを込めて、『第一回 定期演奏会』と銘打った初めての自主公演を開いたのは、一昨年前でした。当時、これが最初で最後のコンサートになるやもしれぬという思いが、ちらっとも脳裏に無かったと言えば嘘になるかもしれません。相当、無理を重ねての背景があったからです。

外では職場の中核を担う立場、家庭では育児、教育、進学問題、それに親の介護といった問題、更には自身の肉体的な問題も加わって、団員が何れも超多忙、疲労の中での活動だったからです。高校時代から培われた、より良い合唱を仲間たちと作り上げたいという、そんな情熱だけが支えであったと言えます。

初代の指揮者は病で倒れ、次の指揮者は介護に忙殺され、今回は三代目が登場します。やはり超多忙の中での担当ですが、さてどんな音楽を聴かせてくれるのか、私も楽しみにしています。

最後になって申し訳ありませんが、本日はお忙しい所をお運び下さり、本当に有難うございます。併せて、更に第三回が開催できますよう、皆様の応援を心からお願い申し上げて御挨拶と致します。

ご挨拶

平部正和
早春の会合唱団団長

本日は私達の演奏会に足をお運びくださり誠にありがとうございます。一昨年6月の第1回の演奏会以降、暫しの抜け殻状態を経ながらも団員の「次の演奏会を開きたい」という強い思いが実を結び、本日を迎えております。この間、土曜日は貴重なFamily timeにもかかわらず、毎週私達を練習に送り出してくださった団員のご家族と、そして教職、オーケストラの指揮、絵画活動に超多忙な中、快く指揮を引き受けて下さった玉置先生に感謝したいと思います。それでは2年間の充電の成果が出ておりますかどうか、最後までお聴き下さるようお願い致します。

玉置清明
早春の会常任指揮者

あれからすでに30余年、当時と同じメンバーが毎週集まってくる。
学校群制度による運命的な目黒高校入学は、正に人生を決定づける衝撃の出会いだった。音楽部の新入生歓迎の合唱！爪先から頭のてっぺんまで鳥肌が立ち、全心身を貫き揺さぶる未知の世界が突然拡がった。
迷わず入部。愛着ある先生と親密な仲間、内面からの音楽表出と、芸術、文学、人生論。僕らは青春の燃焼の中で、確かに人生哲学を深めた。

あれからさまざまな風に吹かれ、波に洗われ僕らはそこに何を付け加えられたのだろう。

昨年２月、はじめて早春の会合唱団のタクトを執った時、そうこの息遣いこのフレーズ！

グローリア　　ビバルディ 作曲

武満　徹　作品

島へ

小さな空

○と△の歌

「花に寄せて」　　星野富弘 作詩

新実徳英 作曲

たんぽぽ

ねこじゃらし

しおん

つばき・やぶかんそう・あさがお

てっせん・どくだみ

みょうが

ばら・きく・なずな ── 母に捧ぐ ──

休憩

小さな協奏曲（コンチェルト）　木坂　涼　作詞　寺島尚彦　作曲

この世の中にある　石垣りん　作詞　大熊崇子　作曲

道　伊藤海彦　作詞　三善　晃　作曲

女声曲　ゆりかご・ほたるこい・夏は来ぬ

男声曲　春を待つ（多田武彦　作曲）・ローレライ

黄金の翼　　ヴェルディ作曲

流浪の民　　シューマン作曲

ウィーンの森の物語　ヨハン・シュトラウス作曲

指揮　玉置清明　/　伴奏　仲谷智子

早春の会合唱団

曲解説　　玉置清明

武満　徹　作品

「混声合唱のための うた Ⅰ・Ⅱ」の各曲は、いずれも映画やテレビドラマの主題歌等として作曲された独唱曲を武満徹氏自身が無伴奏混声合唱曲に編曲したもので、味わい深い独特な世界をもっています。作曲者が自身の耳と感性を頼りに１音１音選び抜いて書き上げたであろう綿密なスコアは、いわゆる作曲理論にまったく縛られないだけでなく、一般的な合唱の声部進行からも大きく逸脱しています。柔らかなハーモニーの自然さとは裏腹に、合唱団にとっては音を取る段階からとても難しく、ソプラノ以外のパートは実はパズルのような音程を歌っているのです。リズムも曲想も多様で微妙、でもそんな苦労がみじんも感じられないほど自然に聞こえたら大成功なのです。

花に寄せて

「花に寄せて」は、詩画集「風の旅」に納められた、自己と自然を見つめる優しくそして力強い詩に作曲された組曲です。作詞者の星野富弘氏は、体育の先生でしたが指導中の落下事故で四肢の自由を失ってしまい、しかし口に筆をくわえて詩と絵を書き続けている人で、その作品からは生きる勇気と感謝が温かく伝わってきます。（彼の故郷である群馬県勢多郡には星野富弘美術館があり、作品のオリジナルを見ることができます。）この組曲の中の何曲かは初代指揮者の松田さんの頃から取り組んでいた曲であり、メンバーにとっても特別の思いのあることでしょう。心ををこめて歌いあげたいと思います。

小さな協奏曲　この世の中にある　道

「ＮＨＫコンクール」の課題曲には素晴らしい曲がいくつも選ばれています。「小さな協奏曲」は、１５年ほど前の中学校の課題曲で、爽やかな混声３部です。「この世の中にある」は平成１１年の高校の課題曲です。難解な詩はいつも疑問と議論をひきおこし、私は「結び目」の謎を解くために歌い続けていこうと思うようになりました。そして「道」は昭和４４年、目黒高校音楽部が、作曲者である三善晃氏から『心を吐露されたと思います』というあのお褒めの手紙を頂いた曲で、合唱とピアノによるダイナミックなカタルシスは、課題曲中最高の名曲だと思います。

ウィーンの森の物語

「ウィーンの森の物語」は、高校時代、「青きドナウ」と共にクレメンスクラウス／ウィーンフィルのレコードにあわせてみんなでぐるぐる音楽室の中を踊り回ってウィンナワルツのリズムを体で覚えた１曲です。ワルツにこだわった合唱団も珍しいと思いますが、ウィンナワルツを体得することで自由なリズムや表現の貴重なベースを身につけたと思います。音楽室でかかっていた曲や表現の参考曲も必ずいつもオーケストラの曲で、合唱曲は一度も聴いた記憶がありません。今回再びウィンナワルツの楽しさを皆で味わってみたいと思います。

武満　徹　作品

島へ　　井沢　満　詞

1 見知らぬ人よ　あなたは何処にいるのですか
　めぐりあいを信じていますか
　ガラスの廻転扉をひとつまわったら
　あなたの胸にぶつかるでしょうか
　都会の海に漂い
　島をさがしつづけています

2 彷徨(さすら)う人よ　あなたは歩きつづけますか
　繋(つな)ぐ掌と掌もとめていますか
　心の水平線さえいつか見つけたら
　あなあたとわたし出逢えるでしょうか
　結ばれ睡る緑の
　島をさがしつづけています

小さな空　　武満　徹　詞

1 青空みたら
　綿のような雲が
　悲しみをのせて
　飛んでいった

（リフレイン）
　いたずらが過ぎて
　叱られて泣いた
　こどもの頃を憶(おも)いだした

2 夕空みたら
　教会の窓の
　ステンドグラスが
　眞赫(まっか)に燃えてた

3 夜空をみたら
　小さな星が
　涙のように
　光っていた

○と△の歌　　武満　徹　詞

地球ハマルイゼ
林檎ハアカイゼ
砂漠ハヒロイゼ
ピラミッドハ三角ダゼ

空ハ青イ
海ハ深イ
地球ハマルイ
小サナ星ダゼ

地球ハマルイゼ
林檎ハアカイゼ
ロシアハデカイゼ
バラライカハ三角ダゼ

島へ
©1983, Schott Japan Company Ltd.
小さな空
©1981, Schott Japan Company Ltd.
○と△の歌
©1984, Schott Japan Company Ltd.

花に寄せて　　星野　富弘 詞

I　たんぽぽ

いつだったか
きみたちが空をとんで行くのを見たよ
風に吹かれて
ただ一つのものを持って
旅する姿が
　うれしくてならなかったよ
人間だってどうしても必要ものは
ただ一つ
私も　余分なものを捨てれば
空がとべるような気がしたよ

II　ねこじゃらし

思い出の向こう側から
一人の少年が走ってくる
あれは白い運動ぐつを
初めて買ってもらった日の
私かも知れない
白い布に草の汁を飛び散らせながら
あんなにも
　　あんなにも嬉しそうに
今に向かって　走ってくる

III　しおん

ほんとうの　ことなら
　　多くの言葉は
　　いらない
野の草が
　　風にゆれるように
　小さなしぐさにも
輝きがある

IV　つばき・やぶかんぞう・あさがお

木は自分で
動きまわることができない
神様に与えられた　その場所で
精一杯　枝を張り
許された高さまで
一生懸命　伸びようとしている
そんな木を
私は友達のように思っている

いつか　草が
　　風に揺れるのを見て
弱さを思った
今日
　草が風に揺れるのを見て
強さを知った

一本の茎が
一本の棒を登って行く
棒の先には夏の空
私も　あんなふうに登って行きたい

V　てっせん・どくだみ

花は自分の美しさを
知らないから
美しいのだろうか
知っているから
美しく咲けるのだろうか

おまえを大切に
摘んでゆく人がいた
臭いといわれ
きらわれ者のおまえだったけれど
道の隅で
歩く人の足許を見上げ
ひっそりと生きていた
いつかおまえを必要とする人が
現れるのを待っていたかのように
おまえの花
白い十字架に似ていた

Ⅵ　みょうが

畑の草を一日中むしり
かいこに桑をくれ
夕方　ひょいっと出かけてみょうがをとり
それを売っては
弁当のおかずを買ってきてくれたっけねえ
　いつもしょっぱい　こぶのつくだ煮
花の咲いたやつは安くなるからと
花を抜いて売ったこともあったよね
もんぺと地下たびの間は
蚊にさされた跡がいっぱいだった
かあちゃん
みょうがを食うとばかになるというけれど
おれは
思い出すことばっかりです

Ⅶ　ばら・きく・なずな

淡い花は
母の色をしている
弱さと悲しみが
　　混じり合った
温かな
母の色をしている
母の手は
　菊の花に似ている
固く握りしめ
それでいてやわらかな
母の手は
　菊の花に似ている
神様が　たった一度だけ
この腕を動かして下さるとしたら
母の肩を　たたかせてもらおう
風に揺れる
ぺんぺん草の実を見ていたら
そんな日が
本当に来るような気がした

小さな協奏曲（コンチェルト）　　木坂　涼　詞

カセットテープが　音をなくしても
まわっている
今日という日が　いっしょに
巻かれていく

まぶたの裏の空が　晴れています
風が吹いています

プールサイドの　黄色いタオル
すみっこの　君のイニシャル
水に映る影　影・・・
あの時の君の笑い声

音のないテープのむこうに
一日がもうすぐ巻ききる

カセットテープが　音をなくしても
まわっている

今日という日が　もう一度
巻かれていく

まぶたの裏の雲が　染まっています
草が揺れています

グラウンドに散る　縞（しま）のユニフォーム
走っていく　君の背番号
夕陽（ひ）にのびる影　影・・・
あの時の遠いホイッスル

音のないテープのむこうに
一日がもうすぐ巻ききる

夜の風の中で
いれかわっていく夏と秋
新しい日
新しいわたしたち

この世の中にある　　石垣りん　詞

この世の中にある、たったひ一つの結び目
あの地平線のはての
あの光の
たったひとつのむすびめ
あれを解きに
私は生まれてきました
私は地平線に向かって急いでおります
誰が知っていましょう
百万人の人が気付かぬちょっとした暇に
私はきっとなしとげるのです

――――まるで星が飛ぶように――――

「さよなら人間」
私はそこから舞い出る一片の蝶
かろやかな雲、さてはあふれてやまぬ泉
ふく風
ああそこから海が、山が、空が
はてしなくひらけ
またしてもあの地平線
ゆけども、ゆけども、ゆけども――――。

道　　伊藤　海彦　詞

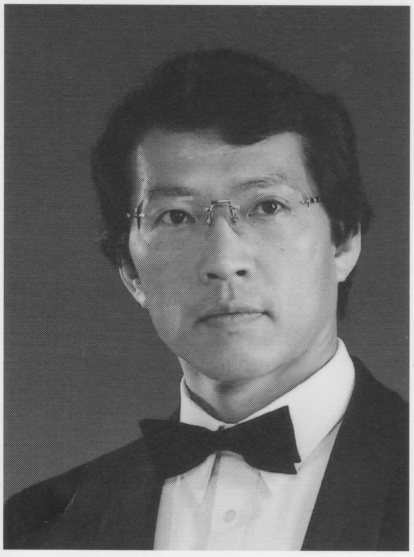
道はのびる
陽(ひ)にやかれ　雨にうたれ
道はのびる

川にそい　山をふちどり
折れまがれ　またのぼりつめ
言葉なく　ただひとすじに
　道よ　道よ　ああ
　いつも旅立ちをささやくものよ

道はつづく
眼(め)のなかを　今日も遠く
道はつづく

吹く風の　声にまねかれ
野をよぎり　青いかなたへ
はてしなく　ただひたすらに
　道よ　道よ　ああ
　いつも到着を夢みるものよ

日本音楽著作権協会（出）許諾第0208428-201



■指揮　玉置 清明

都立目黒高校、東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。
教職を軸に独唱、合唱、オーケストラ、編作曲、美術制作など巾広い活動を続けている。熊谷守一大賞展等多くの公募展に入賞。現在、早春の会合唱団、秦野市民交響楽団指揮者。神奈川県立弥栄東高校音楽コース教諭。

■ピアノ　仲谷 智子

都立目黒高校、武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。
久富綏子、澤田紀子の各氏に師事。
ピアノ教室主宰、サロンコンサート等の企画、演奏活動を行っている。
早春の会合唱団創団時より伴奏をつとめる。

2002.7.27　デザイン・編集　PLANTA